Kappa Novels

この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このほかに、「カッパの本」ではどんな本を読まれたでしょうか。このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　神吉晴夫

長編小説　千金の夢（せんきんのゆめ）　¥350

昭和45年3月10日　初版発行

著者　三好徹（みよしとおる）
東京都世田谷区玉川奥沢町1-289-1

発行者　神吉晴夫

印刷者　磨田照雄
東京都文京区水道2-4-26
慶昌堂印刷

発行所　東京都文京区音羽2　振替東京115347　株式会社　光文社

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（関川製本）

表紙の模様・意匠登録　116613　© Tōru Miyosi 1970

(分)0-2-93(製)02177(出)2271 (0)

千金の夢

三好 徹

カッパ・ノベルス

目次

銀座の夜 5
花売り少女 15
地の中の黄金 25
乱世 33
古文書 43
スポンサー 52
仮面の女 63
沈んだ船 74
不二丸 94
女の幸福 101
暗雲 113
資金づくり 130
現金と悪人 163
モンキー一家 176
海 185
黒幕 215
挑戦 226
夢の跡 241

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本文のイラスト・片岡（かたおか） 真太郎（しんたろう）

銀座の夜

銀座の高級クラブ「ブルーダリア」に、若い男の客がはいってきたのは、閉店まであと一時間というころだった。

マダムの佐貫乃里子は、「いらっしゃいませ」と頭を下げながら、それとなく、この初めての客を観察した。二十六、七歳で、背広は着ているが、ネクタイはしめていない。会社の重役クラスとか、名の知れた作家、評論家などを常連にしているブルーダリアには、ふさわしくない感じだった。

「あの、どなたかとお待ち合わせでございますか」

と乃里子は、とっさの判断でたずねた。ウイスキー一杯で何千円という高い勘定になる。外見からは、とても払えそうにない客なのだ。フリの客で、待ち合わせでないとわかれば、メンバーシステムを理由に、ことわってしまうつもりだった。

男は、にこっとした。ひどく明るい口調でいった。

「ああ、曾村さんとね」

「そうですか。どうぞこちらへ」

と隅の席に案内しながら、乃里子はほっとしていた。曾村は常連の一人で、いま売れッ子の社会評論家である。週刊誌にルポ記事なども連載しており、これまでにも、ブルーダリアを待ち合わせの場所に何回となく使っていた。

若い男は、おしぼりで顔をふきながら、品定めをするような目で、店内のあちらこちらにいるホステスをながめた。四十人に近いホステスは、いずれも水準以上の美人である。若くてきれいなホステスをそろえていることで、ブルーダリアは繁盛していた。

「あの女性を呼んでくれないかな」

と若い男は、ミニスカートのホステスをゆびさした。それはユカリというホステスで、美貌とプロポーションのよさでは、店でもゆび折りであった。

乃里子はボーイにいって、ユカリを呼ばせると、自分は会計の小部屋にはいった。およその見当はついているが、この夜の売上げをたしかめておきたかった。

しかし、十分もたたぬうちに、ユカリが血相をかえて

やってきた。
「ママ、わたし、いやだわ。あんな客の席につくのは」
ユカリは美しさを鼻にかけて、わがままなところがある。いつものくせが始まったかと思いながら、
「どうしたのよ？」
「だって、いくら出せば、今夜つきあうのかなんていうんですもの。まったく、頭にきちゃったわ」
とぷりぷりしていった。
ユカリの言葉が事実ならば、乃里子としても彼女をわがままだといって叱るわけにはいかない。常連客のなかには、十万円で今夜どうだ、などとホステスをからかうものもいるが、もちろん、それは酒席の座興である。
乃里子は客席へもどった。客扱いにかけては自信があった。五年前に小さなスタンドバーから出発して、銀座でも一流の店にしたのだ。
とり残されている若い客は、悠然とグラスを口に運んでいた。そして乃里子と目があうと、おかわり、というふうに、空のグラスを持ちあげてみせた。
乃里子は、仕方なくボーイに合図してから、このえたいのしれない男の席についた。
「曾村先生、遅いですわね」
と彼女はきいてみた。
「そうだねえ」
男はひとごとみたいに相槌をうった。
「曾村先生のお仕事を手伝っていらっしゃるんですか」
「ぼくかい？　いや、手伝ってはいない」
男は運ばれてきた新しいグラスに口をつけると、
「ところで、さっきの美人はどこへ行っちゃったんだろう？」
「ユカリですか」
「そうそう、そのユカリちゃんだ」
「からかわれたと思って、気を悪くしているんですよ。若い子をあまりからかうもんじゃありませんわ」
「からかう？」
男は一瞬きょとんとしたが、すぐにひどくよく響く声で笑い、
「そういうわけでもないんだ。じつをいうと、あれは本当の気持ちさ。彼女みたいな美人といえども、黄金の輝きの前には、目がくらむんじゃあるまいか、と思ってね」
乃里子はきっとなっていった。
「そりゃ、銀座にも、そういう子はいるかもしれません

けれど、うちじゃ、そんな子は置いていませんわ」
「そうかなァ」
「そうですとも」
乃里子の声は、ひとりでに尖ったものになっていた。だが、小憎らしいくらいに、男はあいかわらず平然としている。
「いま、マダムがなにを考えているか、当ててみせようか」
「おわかりになる？」
「わかるとも。この客、若いくせに生意気だわ、と思っているんじゃないかな。それと、お勘定のほうも心配しているかもしれない」
「……」
「大丈夫だよ。ぼくは一千億円もっている」
男はけろりといって、内ポケットからハトロン紙の封筒をとり出した。
乃里子は耳を疑った。男は一千億円もっている、というのだ。思わず、
「その封筒の中にですか」
と問いかえした。
男はにっこりした。白い歯ならびが、健康な感じをあたえる。目も澄んでいて、あながち気ちがいではなさそうだった。
「そうなんだ。もっとも、正確にいえば、一千億円に相当するもの、といったほうがいいかもしれないが、ね」
「中身はなんですの？」
と乃里子はつりこまれて訊いた。
その声が耳にはいらないのか、男は掌にのせた封筒をじっと見つめ、それからポケットにしまいこむと、
「こないのかなァ。こないとなると、困ったなァ」
と呟いた。
じっさい、時刻は十一時を過ぎていた。曾村は、時間にはきちょうめんなたちで、約束に遅れることは、めったになかった。なにかの都合で遅れることがあるとしても、そんなときは、たいてい電話で連絡してくる。乃里子はいった。
「お仕事場に電話かけて訊いてみましょうか」
「仕事場？」
「ええ、曾村先生は、ローヤル・ホテルの一室を借りきっていらっしゃるでしょう」
「ふうん」
唸るような男の返事を聞いて、乃里子はふと不安にな

った。曾村がローヤル・ホテルを仕事場にしていることは、かれと親しいものならば知っているはずなのだ。それを知らないらしいこの男は、本当に待ち合わせなのだろうか。

「まあ、いいや」

乃里子の不安をよそに、男は屈託のない声でいい、立ち上がりながら、

「また出直してくるとしよう」

「もう、お帰りですか」

同じように腰をうかしながら、乃里子は困っていた。この、どこの誰ともわからぬ男の勘定はどうしたものだろう？　曾村がいれば、もちろん問題はなかった。が、曾村は現われないし、この男がどの程度にかれと親しいのかもわからなかった。

かりに曾村がそんな男は知らんとか、あるいは知っているが払う義務はない、といえば、曾村に請求するわけにはいかない。また逆に、この男から勘定をとったあとで、曾村から、それじゃおれの面目が立たん、と叱られても困るのである。

すると、男はなにを思ったか、

「すまんが、これを曾村さんに渡してくれませんか」

といって、例の封筒を取り出した。

「だって、これ……」

乃里子は一千億円入りという封筒を見つめた。小切手ならいざしらず、どうみても、一千億円の値打ちのものがはいっているとは思われない。それに、一千億円などというべらぼうな巨額の小切手などは、この世に存在しないだろう。

「ええ、一千億円相当です」

男は、乃里子の心を見すかしたようにいった。

「困りましたわね」

どうも気ちがいにひっかかったらしい。いや、顔を見ると、そうも断定できない。変な男にはちがいないが、若々しい張りのある顔立ちである。

「困ることはないですよ。ともかく、あずかっておいてください」

男はいぜんとして朗らかな声でいい、封筒を乃里子の手に押しつけ、

「大切なものにはちがいないが、銀座の一流バーのマダムならば、信用できますからねえ」

といった。

そういわれると、乃里子も悪い気はしなかった。自尊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

心をたくみにくすぐられた。もしこの男がそこまで見すかしていったとすれば、なかなかの人間通といってもよかった。
「でも……」
「でも、もヘチマもないですよ」
「じゃ、おあずかりしておきますけれど、曾村先生にはどういうふうにお伝えしておきましょうか」
男はちょっと思案してから、手紙を残しておこうといい、乃里子にメモ用紙と封筒を頼んだ。そして、なにか書くと封をし、表面に「曾村先生　源田」と記入した。
見ていた乃里子が、
「源田さん、とおっしゃいますのね？」
と訊くと、源田という青年は人なつこい微笑をうかべ、
「未来の億万長者、源田三郎ですよ。お忘れなくね」
といって、出て行った。
乃里子は、封筒を手にしたまま、ちょっとの間ぼんやりした。ブルーダリアには、いろいろな客が出入りするが、今夜の青年のような客は初めてだった。生得のものらしい明るい雰囲気。その半面ユカリを怒らせたような図々しさ。
不意に、ホステスたちの嬌声がして、乃里子はわれにかえった。
はいってきたのは、曾村だった。どこかで飲んできたらしく、顔を酔いで染めている。かれは、先刻まで源田のいた席に勝手にすわりこむと、お気に入りのユカリを抱きよせ、
「どうだ、今夜、おれの仕事部屋で乱交パーティーでもやらんか」
とわめいた。
ユカリは、胸のへんにまつわりつく曾村の手をたくみに払いのけながら、
「先生たら、いままでどこで浮気していたのよ。さっきまで、ここで変なお友だちが待っていたわ」
「変な友だち？」
乃里子は、曾村の隣りに腰を下ろして、例の封筒と源田の書き残した手紙を渡した。
「曾村先生と約束があるとかおっしゃって、かなりお待ちになっていたわ」
「へえ、誰だろう？」
「あらッ、お待ち合わせじゃなかったの」
「おれは知らんぞ」
曾村は、受けとった封筒を不思議そうに眺めていた。

「変ねえ。これ、一千億円に相当するとかいっていたけれど、やっぱりだまされたのかしら」
曾村が封を切った。
書き残した文面は「ご多忙中恐縮ですが、別紙封入のものをご検討ください。これは江戸幕府が埋蔵した時価一千億円にのぼる軍用金の所在をさぐる手掛りです。くわしいことは、いずれお目にかかって説明いたします」とあった。
「なんだい、こりゃ」
曾村は頭のてっぺんから出るような声を出して、ハトロン紙の封筒を破いた。
なかから出てきたのは、古文書の電子コピーだった。二枚はいっており、一枚は見取図らしい図面で、もう一枚は、片カナまじりの達筆で書かれていた。
――先ハ将ヲ求メヨ
一将ヲ求メムニハ
甲百五十　乙二百五十　丙三百五十　丁五十ナリ
サラニ一将自リ七臣ニ達スヘシ
七臣ヲ求メムニハ
戊三百　己二百　庚百
右□□ト□ルハ是足□ノ両用トス
又戊□ト記シタルハ□ノ続キタル記ナリ
此証ノ存スル時ハ七□ニ達スルコト目前ナルヘシ
文書のなかの□は、虫食いの跡だった。
「なにがなんだか、さっぱり見当がつかんが、この男がどうして、こんなものをおれに残したんだ？」
と曾村は乃里子を見つめた。
「先生、本当にご存じないの？　源田三郎さんとおっしゃる、二十六、七の方よ」
「知らないさ」
してやられた！　と乃里子は思った。だが、不思議と憎しみはわかなかった。源田という青年の人なつこい笑顔だけが、心に残っていた。
曾村が、その写しをくしゃくしゃに丸めて捨てようとした。
「ちょっと待って。お勘定の代わりにとっておくから」
と乃里子は声をかけた。
「これかい？」
「ええ」
「こんなもの、どうせインチキにきまっているじゃないか。幕府の埋蔵金なんて、あるわけがない」

「でも、先生。いつだったか、銀座の小松ストアの地下から、小判が出たことがあったじゃありませんか」
「そういえば、そんなことがあったねえ」
「だったら、これだって本当かもしれないじゃないの」
「そうはいってもねえ……」
曾村は肩をすくめてみせ、
「なァ、ユカリちゃん、もっと現実的な話で、どうだね、乱交パーティーというのは？」
とユカリのむき出しのももに手をのばした。
「いやよ、先生とじゃ」
「どうして？」
「行ってみたら、先生とわたしだけの乱交パーティーなんていう恐れがありそうなんですもの」
「こいつは見破られたか」
曾村の高笑いを聞き流しながら、乃里子は、とり戻した古文書の写しを帯の間にしまいこんだ。
たしかにこんな古文書の写しを信ずるのはバカバカしいことかもしれない。そのうえ、源田三郎という男は、曾村の知り合いでもなんでもないのだ。
しかし、逆に考えれば、源田はどうして曾村の名前を出したのだろう？　あるいは、なぜ曾村にこの写しを見せようとしたのであろう？
「ねえ、先生」
乃里子は、真剣な声になって呼びかけ、この疑問を曾村にたずねた。曾村は、
「そうだなァ、それは前におれが週刊誌に頼まれて、埋蔵金の夢という原稿を書いたことがあるからじゃないかな」
「それ、いつごろですの？」
「かなり前だよ。日本全国のあちこちに埋められているお宝の話さ」
「本当にあるのかしら」
「あることはあるさ」
曾村は乃里子の真剣さに惹きこまれたのか、すわり直した。
真剣なのは、曾村ばかりではなかった。ユカリも耳をすませていた。曾村は、おもしろそうに二人の女をながめてから、
「たとえば、対馬の琴村の沖には、バルチック艦隊のナヒモフ号という軍艦が沈没しているが、このナヒモフ号に積まれていた金貨は時価五十億円という話だ」
「五十億円！」

「うん、こいつは本当の話なんだ。そのほかリューリック号という軍艦も沈んでいるし、松江の沖にはイルティシュ号というのも沈んでいる」
と曾村はやや得意気にいった。
ユカリが、からだを乗り出してきた。
「先生、ほかには？」
「マダムだけかと思ったら、きみもか」
「いいじゃないの。おもしろいんですもの」
「とかなんとかいって、本当は欲の皮をつっぱらせているんだろうが」
曾村はユカリの肩に手をまわして引き寄せたが、ユカリはその手を払いのけようとはしなかった。
「よし、それじゃ、教えてやろう。北から説明すると、まず北海道の神威岳だ。ここにアイヌが宝を埋めた。その近くの忠類というところにあるチョマナイ洞窟にも埋められているという説もある。でも、これは駄目だろう」
「どうして？」
「チョマナイだから、ないのさ」
「いやだわ、本気になって聞いていれば……」
とユカリは、それまで自由にさせていた曾村の手をはずした。
曾村は苦笑して、
「冷たいなァ、きみは。しかし、チョマナイという洞窟のあることは本当なんだ。そのほか、秋田の八郎潟。この底には、芦名家が財宝を沈めた。さらには、ぐっと日本海沿いに下ると、黒部の山中、ここには佐々成政が沙羅越えをしたさいに、将来に備えて多額の軍用金を隠した……」
乃里子やユカリばかりではなく、他のホステスもいつの間にか集まってきていた。曾村は、すっかり図にのって、
「お次は中国だ。ここはあっちこっちにあるが、正直にいっていずれも小モノばかりで大したことはない。有望なのは九州で天草の下島。この桂岳の麓の三角池には、約六キロの純金製十字架十個、同じく燭台二十個、南蛮渡来の宝石をちりばめた宝冠一個。ほかに大判小判がざっくざっく、ざっくざく、だ」
と最後は童謡ふうに唱った。
「先生、からかわないでよ」
ユカリが不服そうにいうと、曾村は、
「からかっちゃいないさ。天草の場合なんかは、ちゃん

と文書が残っている。詳しくは覚えていないが、くさぐさのでうすのたから、しずめしずむる、といった文章でね。なにしろ天草は隠れキリシタンの本拠地だったからな、あっても不思議はない」

「ほかには？」

「口説くときには冷たいくせに、こんな話になるとみんな熱心だな。仕方がないから教えてしまうが、お次は四国だ。ここにも沢山あるぞ」

そのころになると、客がつぎつぎに席を立ちはじめた。マダムの乃里子としては、放っておくわけにもいかない。曾村の話が気がかりではあったが、帰る客の応接で、聞く余裕はなかった。

やがてそれも一段落し、曾村の席に戻ろうとすると、けたたましい笑い声がして、曾村の周りにいたホステスたちが、いっせいに立ち上がった。なにか冗談をいったらしく、

「やだァ、先生たら」

とユカリが背中をたたいている。

曾村は乃里子が近寄って行くと、

「さて、帰るとするかな」

「あら、もうお帰りですの」

「もう、といったって、十二時近くになっているじゃないか。これから、またこれさ」

とかれは、ペンを動かす真似をしてみせた。

「お仕事ですか」

うん、というように曾村はうなずいてみせ、思いのほかしっかりした足どりで出て行った。必ずしも酔っているわけではなさそうであった。

乃里子は、会計の小部屋へはいり、その夜の売上げを計算した。会計係は信用できる人間であったが、一切を任せるわけにはいかなかった。

パトロンもちの店とは違って、女の力でここまでにしたのである。考えてみれば、その苦労は並みたいていのものではないのだ。冷たい夜具をかみしめて泣いたことさえある。

だが、一流店になったからといって、それで乃里子は満足する気はなかった。ほかにも支店を出し、将来は、場所を選んでビルを建てようという夢を抱いていた。むろん、それには巨額の資金がいる。ブルーダリアの利益だけでは、タカがしれていた。

乃里子は、ふと源田三郎という青年のことを想い出して、かれの飲食代を調べてみた。水割り三杯、おつま

み、サービス料などで一万円をこえている。曾村に請求できない以上、それは店の負担になる。
彼女は帯の間にはさんだ封筒をとり出してみた。
見取図はどこのものとも知れなかったが、文書のほうは、雅趣にとんだ筆跡や虫食いの跡から、いかにも本物らしく見える。
乃里子は、電話器をとりあげて、ローヤル・ホテルへかけた。銀座に近いホテルには、もう曾村が帰っているはずだった。
しかし、交換手はいった。
「曾村先生はお出かけになって、まだ戻っていらっしゃいませんが、なにかご伝言でもありましたら……」
「いいわ」
乃里子は電話を切った。はっきりした根拠はなかったが、曾村はユカリとどこかへ行ったのではないか、と直感した。

花売り少女

源田三郎は、ブルーダリアを出ると、並木通りをぶらぶらと歩きはじめた。あたりのバーやクラブの看板どきで、路上は、客やホステスでかなり混雑している。その雑踏をぬうようにして、花売りの少女たちがまつわりついていた。
「ね、おじさん、お花を買って」
と一人の少女が、ホロ酔い機嫌の源田を客になりそうだと考えたのか、花束をその手に押しつけてきた。
「なかなかきれいな花だな」
源田は花束を手にとり、鼻先へもって行って匂いをかぐようにした。
「これ、いくらだい？」
「そうね。もう遅いし、最後だからお安くしておくわ。百円でいい」
「百円か。だけど、悪いが百円じゃ買えないな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com